

〔(社)日本技術士会近畿支部建設部会主催〕

都市災害に備えるネットワークづくり—巨大災害に私達が立ち向かう時—

本稿は、第4回「地域防犯技術展：震災対策技術展：自然災害対策技術展」大阪において、(社)日本技術士会近畿支部建設部会主催で開催した報告である。第1回「震災対策技術展」神戸は、平成7年1月17日の阪神・淡路大震災を契機に翌々年から開催されていた。今回のシンポジウムは、昨年に引き続き平成22年6月10日にインテックス大阪3号館において、“都市災害に備えるネットワークづくり—巨大災害に私達が立ち向かう時—”と題し開催された。福祉・防災団体(神戸学院大学、兵庫県立舞子高校卒)、被災地NGO団体、泉南市自治防災会などの活動が報告され、都市計画、土木、建築各界と日本技術士会など関係者や一般参加者など80名余りの参加を得て、熱心なディスカッションが展開された。なお当日配布資料には、大森内閣府政策統括官(防災担当)、高橋修日本技術士会会長、福岡悟日本技術士会近畿支部長等から寄せられた誠意と熱のこもったご挨拶文を掲載した。また、6月10,11日にはインテックス大阪3号館において展示を行った。展示会場では我々の活動状況をポスターと資料により多数の来場者に説明し、知名度の向上につながった。

キーワード： 阪神・淡路大震災 南海・東南海地震 災害対応 各界協調 防災NPO法人 ボランティア活動

1. はじめに

平成22年6月10日(木)午後3時から午後4時30分まで1時間30分に亘り、大阪市のインテックス大阪3号館(大阪南港咲洲)において、第4回地域防犯技術展：震災対策技術展：自然災害対策技術展の一つとして、近畿支部建設部会主催で“市民・学生達と考える防災・減災のネットワークづくり(その2)—市民と行政との絆—”と題し本シンポジウムは開催された。北村友博日本技術士会近畿支部副支部長などの出席のもとに80名余りの参加を得て開催された。

司会進行は近畿支部建設部会監事の貴志義昭氏が行い、開会を宣言し開講した。

2. 開会あいさつ

開会挨拶は高橋技術士会会長が行う予定であったが、高橋会長の予定がつかず、前の日本技術士会副会長で現在の近畿支部副支部長の北村友博氏より開会の挨拶が行われた。

○北村友博氏

日本技術士会近畿支部副支部長

(前日本技術士会副会長)

本日は日本技術士会会長の高橋に成り代わりまして、一言私の方から挨拶を申しあげます。

日頃、日本技術士会に対し皆様方の深いご理解と、ご協力をたまわりましてありがとうございます。本日は第4回目の大阪における震災対策技術講演会で御座います。実は神戸の地震から15年たちまして、神戸から始まりましたこの震災対策展でございますが、日

本全国に広がっております。神戸の次は関東・東海方面で心配されております東海沖地震が予測される横浜市で毎年震災展が開催され、札幌市でも開催されております。大阪市も少し遅れて第4回震災対策技術展とすることになります。こうして日本各地の主要な都市で、一般市民の方々、行政の方々、技術者の方々、学会の方々が集まりまして、震災に対して如何に対処していくのか議論していただくのは大変意義のあることだと考えております。

我々技術士会は全部で21の専門分野に分かれて仕事をしているわけですが、日頃から皆様方、一般社会に向けて情報発信するような会合を、出来るだけ開催するよう努めております。特に近畿支部建設部会は以前からそういうことに取り組んでいるグループでございます。最後まで色々な人の意見をよく聞いて、さらに皆様方の方から意見を発信していただき、この会合が盛り上がることを期待して私の挨拶とします。

3. シンポジウム

～パネルディスカッション～

司会の貴志義昭氏よりパネリストの方々を紹介があり、貴志義昭氏の進行で講演が行われた。

パネリストのご紹介(講演順)

○河田のどか氏 有限会社コラボネット、神戸学院大学防災社会貢献ユニット卒

○村井 雅清氏 被災地NGO協働センター 代表

○森広 浩允氏 大阪府泉南市いずみ台防災会 会長
司会者

○貴志 義昭氏 (社)日本技術士会近畿支部建設部会
監事

「都市災害に備えるネットワークづくり—巨大災害に私達が立ち向かう時—」

司会者の貴志義昭氏の進行でシンポジウムが行われた。

○河田のどか氏

＜神戸から広げよう！防災のわ！！～7年間の防災活動からの見えたもの～＞

河田のどか氏は昨年までの防災教育を实践されている立場からの経験談、今後の方針について述べられた。

私は今年の3月に大学を卒業し、西宮にある有限会社コラボネットで福祉や防災などの事業を受託し、地域の安全マップ等の作成をおこなっております。仕事を始めてから期間が短いこともあり、今回は高校と大学を通して私が行ってきた防災活動についてお話しをしたいと思います。

防災との出会いは、私が小学校1年生のときに阪神・淡路大震災を神戸市の須磨区で体験しました。幸い私の家に被害は無く、家族も無事であった。祖父母が神戸市の長田区に住んでおり、火事の被害が大きい所であったが、幸い祖父母の家は火事にはならなかった。しかし、一戸建ての家は全壊した。このことより、なぜこのように大きな被害が出るのか、子供心にも地震に興味を持つようになった。しかし、廻りは地震について思い出したくない、話したくないという雰囲気があり聞くことが出来なかった。ここで地震について自分から学ぼうということで、兵庫県立舞子高等学校環境防災科に進学し、その後神戸学院大学の防災社会貢献ユニットで防災について学び現在に至っている。

防災活動として「国際防災教育支援団体 SIDE」と「地球防災隊」を友人と設立し、大学四年間活動を行ってきました。3番目に皆様の記憶にも新しい四川大地震の被災地に千羽鶴を届ける活動を友人と共に行ったのでその話もします。国際防災教育支援団体 SIDE という団体は私が高校を卒業すると同時に立ち上げられました。阪神・淡路大震災の経験と教訓を世界に発信すること、途上国において防災教育支援をすることが2つのことが主な設立趣旨となっている。

ネパールは中国とインドの間にある国で、地下ではインドプレートとユーラシアプレートがぶつかり合っているところで、70～80年周期で大きな地震がおきる国だといわれております。一方、ネパールでは建物は日干しレンガ作りになっており、家族が増えると上に建物が増築される。建物は建築の専門家でない素人が作っているから、前にせり出して建てられている。こ

のような光景を高校生るとき国際交流事業で現地を訪れたときに目撃した。自分達で何か出来ることはないかと考え、この団体を立ち上げました。私たちがネパールに行くには20万円近い資金が必要であり、1年に1回行くのが限界であります。このため、現地の人に活動を続けてもらうための防災教育の支援を行なう活動をしております。

2007年にはオリジナルな絵本を作成し、視覚的に訴える教材を開発しました。絵本の特徴は5部構成になっており、登場人物や街にネパールの特徴を盛り込み、親しみやすくしております。これを使い小学生から中学生程度の子供に防災教育を実施した。子供達だけでは防災教育の継続性がないのではと考え、先生達を対象としたガイドブックを作成した。これは防災の絵本に対応したもので、先生がこれを使って学生に防災教育が出来るように作成したものです。

昨年は現地のNGOの方と連携して活動したが、その方たちから「心のケア」について話をしたいといわれた。自分達の震災体験をもとに「心のケア」を結びつけて物語を作り、生徒達に話をしました。私自身震災のあと悪夢を見るが多くなり、電気を消して寝ることが出来なくなったという経験があります。ネパールへは防災教育を行うだけでなく、現地の文化を学ぶ、現地の学生と交流するという目的で、ホームステイをしたり、街あるきをしたり、象に乗り犀等の野生の動物を見学したりしました。

次に地球防災隊の活動です。2008年1月に設立されました。小、中、高校に比べ幼稚園の防災教材が極端に少ないことを高校時代お世話になった先生からお聞きし、幼稚園で使える教材を開発するため、この活動を開始した。最初は1つの幼稚園で交渉し、活動するのが精一杯であったが、年々活動が広がり、防災教室以外でも今回のようなセミナーの場で発表できる機会をいただいております。

私達は幼稚園の事前訪問をし、教材のチェックや、教材の修正を行い、防災教室で教えております。出来るだけ手作りの教材ということで、手遊び・紙芝居・〇×クイズ等で5歳児を対象に45分間の防災教室を実施しております。自分たちが歌い、話し、問いかけたりするだけでなく、園児からも何か反応してもらうため、クイズをしたり、ゲームをしたりするプログラムも用意しております。昨年は親子防災教室に初挑戦することが出来ました、お母様方に休日に参加していただき、子供達に防災を教えると同時に、お母様方には非常持ち出し袋についての説明を加えたパンフレットを配布しました。阪神・淡路大震災当時、園児達は

家の復旧作業や、跡片づけに追われる両親達と遊べなかったこと、遊ぶ道具がなかったことで非常に寂しい思いをした。このため、非常持ち出し袋には子供の遊び道具も入れて欲しいことを話しました。

今までは自分達の作った物語をもとに防災教室を行っていたが、震災の現実を知ってもらいたいということで、阪神・淡路大震災当時の映像を園児達に見てもらいました。初めは不安であったが、熱心に映像をみて、「地震とは本当に怖いものだ」と話す園児がいるのが印象的でした。私達は防災教室の時、必ずプレゼントを渡すようにしています。これは防災教室を実施した証しというか、家に持ち帰ってもらい家族で防災について考えて欲しいとの願いです。防災教室以外に保育士を目指す学生を対象に防災セミナーを2回実施しました。

3番目の四川大地震の被災地に届ける「一羽一願プロジェクト」についてですが、四川大地震のニュースがテレビで放映された直ぐ後、お金の支援ではなく、気持ちを届けられないかと思い、一羽に一つの願いを込めるということで、千羽鶴は1人に1羽の限定で折ってもらいました。最初は千羽集まるか不安はあったが、いろんな友人、周りの人達が協力してくださり、5000羽の鶴を集めることが出来ました。私たちメンバーが直接昨年と、一昨年に四川省に届けました。

当初友人を多く亡くしたり、家族、家を失くしたり本当に悲惨な状況であったが、私たちが阪神・淡路大震災で神戸で被災したこと、復興を願ってプレゼントを持ってきたことを伝えると大変感激された。プレゼントは鶴と、絵画教室で作成された絵を持っていった。これらは「地震博物館」に展示されるとのことです。

2009年にも再び四川を訪れました。四川では現地コーディネーターをされている村井さんところのスタッフの方にもお世話になりました。

この3つの活動を通して、私たちは今まで防災活動への取り組みは、私たちの出来る、あるいはやりたい活動について、ただがむしゃらに取り組んでいくことだけであった。その中で周りの人に支えられ、多くのチャンスをいただきながら、活動を続けることができました。ネットワークを作ることが私たちに来なかった。ネットワークの中に私たちが入っていたいという感覚です。

最後に高校時代の国際交流がきっかけとなり、現地のNGOの方々には自分達を仕事の合間をぬって様々な学校、建設中の学校で強度や、耐震の重要性について話をされました。私達はそれらを学び、日本に持ち帰り、小学生や中学生の前で説明し、現地の思いを引き継ぐ

という活動を続けていきたいと思っています。

地球防災隊では様々な人からの紹介を受け防災活動を行っております。地球防災隊は大学の組織、サークルではなく、活動したい人の集まりです。このため一般社会からの信頼度は低い。幼稚園を訪れたとき、園児が怪我をしたとき誰が責任を取るのかと園長先生に言われ、反論できなかった。このとき高校時代の恩師である諏訪先生が責任持つと行ってくださり、彼女達にチャンスを与えて欲しいといわれました。そこから幼稚園と連携が始まりました。最初は1つの幼稚園で1回きりの約束で開始しましたが、園長先生が評価してくださり、活動を続けて今年で3年目になります。日本技術士会の方々には発表の機会をいただき、これをきっかけに兵庫県以外の幼稚園からも防災活動を依頼されるようになりました。

いろんな人達に作っていただいたネットワークではありますが、自分たちの内部のネットワークを作ることが出来ていないことに、活動を通じて最近気がつきました。現在最後のメンバーはSIDEで2名、防災隊で2名の少人数で活動しております。このため個々の負担が非常に大きくなってきており、卒業生が仕事の合間をぬってミーティングに参加して活動を支えているのが実情です。せつかく様々な人達のチャンスをいただき、活動を広げてきたのに、自分達が活動を継続できる体制を作れなかったのが悔しくてなりません。何とか活動を続けるように話合っている最中で、何とか切り開けたらよいと思います。

私たちの当初の活動目標は自分達が直接防災教育を行うことではなく、現地の人達、保育士の方々に、防災教育の担い手になっていただき、防災の考えを広めていただきたいという思いがありました。しかし、自分達が実施するのが主流となっており、ネットワークを通して防災の考えを広める困難を実感しました。



写真1 河田のどか氏

○村井雅清氏
被災地NGO協働センター代表

＜都市災害に備えるネットワークづくり～巨大災害に私達が立ち向かう時～＞

村井雅清氏は被災地 NGO 代表の立場から阪神・淡路大震災の経験を活かしたボランティアのネットワークづくりについて述べられた。

この仕事を始めたきっかけは 15 年前に経験した阪神・淡路大震災である。現在国内の災害救援を主な仕事としている NGO の代表を勤めております。CODE という海外支援を行う団体も運営しており、これから話の中で海外のことも紹介します。先ほど講演され河田さんは私どもと共に仕事をされておりましたので感慨を持って聞いておりました。

阪神・淡路大震災は成熟した都市を襲った地震で地震被害は世界最大で、まだこれをこえた地震はない。ハイチの地震も、2 年前の四川大地震も成熟した都市ではない。そういう意味で成熟した都市で発生した地震が、阪神・淡路大震災であることをもう一度思い起こして欲しい。このため、火災が発生すると被害は甚大となる。私は長田区のケミカルシューズ業界で働いていたが、仕事が出来なくなったのがきっかけでボランティア活動を始めた。

また、阪神高速道路が 600m に亘って倒れた。当時政府はまさかこの程度の地震では壊れないと言っていたが、8 時頃の情報で壊れたことが判明した。これが成熟した都市の実態である。残念ながら建築物もろくも崩れ、6434 名の方が亡くなられた。そのうち約 85% は建物の下敷きになってなくなられた。地震対策は地震により建物が壊れないようにすることが重要である。このことは皆分かっていることであるが出来ていない。15 年経って様々な人達が、この 15 年間の苦しみや悲しみを表現されておりますが、この 15 年目は若い人達が歌を唄ったり、詩を作ったり、絵画を描いたり、小説を書いたりと非常に幅広い表現を持って 15 年間を表現しております。我々被災地の 15 年目の課題は如何に伝えるか、如何に備えるかがテーマであったが、15 年目の記事を見ると、若い人達が色々な手法でもって伝えているか改めて教えられた。このことで、15 年前の事が消せるわけではないので、いつまで経っても 阪神・淡路大震災の 6434 名の犠牲者のことは忘れてはならない。

2 年まえの 2008 年 5 月に発生した四川大地震ですが、被害の規模は阪神・淡路大震災よりも大きい。しかし、被害の状況をみると、私が最初申し上げたとおり、阪神・淡路大震災は成熟した都市で 6434 名の犠牲者がでたが、四川は北京、上海を目標に成熟都市を目指していた。このため四川地震では建物の壊れ方を

見ると震災の経験は活かされていない。建築物は地震を考えた設計は行われていない。何のために過去の経験から学ぶのかということであるが、これ以上大きな被害を出さないということで活動を行っている。これが成熟した都市で起きていたらもっと被害が大きくなったかもしれない。

阪神・淡路大震災の後小学 6 年生が書いた詩です。

「きっと神様の罰があたったんや」

「もう、モノはいらん。ぜいたくはいらん」

「水も、電気も、何もかも、ムダに使こうとった」

「消防も、警察もこうへん。いざというときは、

やっぱり、ご近所さんや」

「これからは、自然をいじめんのやめとこ」

阪神・淡路大震災、四川大地震でなぜ大きな被害になったのか。我々は開発、開発と文明を追いかけたことが被害の拡大に繋がったことが、様々な説明がなくても、このわずかに数行のこの詩を読めばわかることです。

今年 1 月にハイチで大きな地震が発生しました。駆け足で 4 日ほど現地に行きました。首都のポートフランスが壊滅的な被害を受けました。人口 900 万人の内 300 万人が被害を受けました。成熟した都市の災害ではないが、ハイチはカリブ海諸国の中で最も貧しい国で被害がおきた。また政治的混乱があり、国連のハイチ安定化ミッションが 2004 年から入っていた状況の中で起きたのが特徴といえる。先進国の日本とハイチとは比べられないが、首都ポートフランスが壊滅的な被害をうけたその後の状況は私たちが学ぶべきものがあるはずである。しかし、日本の関係者はすぐさま飛んでいっていないことは、私にとって大変残念なことであります。ハイチでは被害を受けた人達はその日の内からボランティア活動に参加し、復旧、復興のための活動を始めております。国の再建のため、自らが知恵を出し、体を使って働いている姿が、わずか 4 日間の滞在中でも見ることが出来た。

しかし、ハイチ再建のため、フランス、アメリカ、カナダといった大きな国が何らかの形で介入し、再建を手伝っている。あるいは国連が安定化ミッションという形で入って、ハイチの再建を支援する形になっている。しかし、ハイチの人達がどのような再建を目指すのかという視点が抜けると、ただ外部からの支援に終わってしまうのではないかと一番懸念される。新聞記事を見ると国際機関は脱 NGO といい始めている。しかし、現実にはテントからシェルターへと、耐震性、対サイクロンを考えた住まいに変わりつつあり、この作業を主に行っているのが NGO である。国連も IOM(国際移住機構)を中心にやっているが、1 つの

NGO で 500 軒、1000 軒と多くの NGO がシェルター作りに関っている。脱 NGO 頼みといっても、NGO がなければ出来ないということを国連も、国際機関も認識している。

今年 2010 年の 5 月頃の建築雑誌に惑星物理学者の松井孝典氏のインタビュー記事が載っていた

「私は人間観の構成要素と言う場合には『ユニット』という言い方をしますが、いまそのユニットの取り方が問われている、と考えられるわけです。経済的な活動や、グローバルイゼーションは、個人をユニットに取るという方向にいこうとしていますけれども、システム論的に見れば、これは混沌と無秩序の状態をもたらすということです。それは災害に対して、脆弱でどうしようもない結果をもたらすと思います。」（「地球システム・人間力・駆動力—その最適値をさぐって」より）

これは簡単に言えば、個人個人に集約してみると、まとめて仕事が出来ない、これは災害対策としてはマイナスであると理解している。

我々 NGO、NPO とのネットワークを模索しているが、はたして、巨大都市災害に対して我々は何が出来るとかということ、考えなければいけない。1995.9.11 に阪神・淡路大震災に関する防災問題懇談会が開かれ、ボランティアの重要性が認められた。1995.12.9 に防災対策基本法の改正が行われ、1995.12.15 に閣議了解で、毎年 1 月 17 日が「防災とボランティアの日」、毎年 1 月 15～21 日が「防災とボランティア週間」に決まった。その中で内閣府では NPO の理事長をされている、室崎先生も加わったボランティア検討会で議論を続けています。

阪神・淡路大震災では、救助された被災者は 3 万 5 千人のうち 2 万 7 千人の人が、生き残った家族、近隣の人、ボランティアの人達に救助された。その当時防災訓練等はされておらず、救助訓練もされていなかった。必死の思いで救助され、その思いが 2 万 7 千人の人の救助につながった。自力で脱出した人が 37% いると聞いているが、いずれにしろ、先ほど松井先生が言われた、「個に集約すれば災害にはマイナスである」となるが、一人一人の思いが 2 万 7 千人の数字が出たことにつながった。このことが、阪神・淡路大震災の事実としてある。警察、消防、自衛隊が約 8 千人を救出した。この数字を説明するとき、素人である一般人が 2 万 7 千人を助け、プロである警察、自衛隊が 8 千人しか助けられなかった事を言いたいわけではない。プロが助けた 8 千人は助からなかったかもしれない命を助けたもので、我々は 2 万 7 千人を 2 万 8 千人、2 万 9 千人に積

み上げなければならない数字である。15 年経って全国各地で日頃どの程度訓練が行われているのかが問われている。もう 1 人の命を救うための訓練、活動が行われるべきである。

阪神・淡路大震災の時のボランティアが行ったことは、救命救出、水の配給、炊き出し、とライフラインを支えた。100 万人のボランティアが参加した。その後ボランティアは減っていったが、活動はその後も続いた。ボランティアは私のような専門ボランティアだけではなく、僧侶は読経等その人に出来ることを行った。ボランティア活動はライフラインを支える役割から、生活支援を行う役割に変わっていった。

私は減災サイクル（発災→応急対応→復旧・復興→被害抑止・被害軽減→地域自立の経済・地域分権）を主張している。災害が発生すると、応急対応、復旧・復興というステージがきます。次に普通の災害への備え、自立の経済（もう一つの社会）へと続きます。応急対応、復旧・復興の課題を出来るだけ多く挙げ、それを解決する事で減災が出来ると考えている。この 15 年を経てボランティアが社会を変えようと考えている。

先般退陣された鳩山総理が「新しい公共」ということで、円卓会議が開催され、この 15 年間ではじめて阪神・淡路大震災のことが、公式文書でうたわれた。震災直後様々な報告書にボランティアのことが書かれているが、「公共」ということでうたわれた文章は初めてである。この中で、NGO、NPO、行政、企業等の共同体が一時実現した。もう一つは、100 万人以上の人たちが、自分がいることで人の役に立てたと言うことが「新しい公共」の原点である。このような文章が政府から出たということは、阪神・淡路大震災以後 15 年間活動してきた成果であると思う。

5 月 23 日の西日本新聞に「伝統構法は先端技術」という記事が掲載されていた。伝統構法は先端技術の対極にあると思われるが、伝統構法ほどよく考えられた技術はないと鈴木先生は言われております。政府は伝統構法と在来工法の地震時の耐震の違いについて検討している。先端工法と伝統構法に地震時の耐力にあまり相違が見られず、伝統構法が見直されている。「伝統構法は先端技術」ということはボランティアのこれからの働きによく似ている。コンクリート構造物様な剛の建物より、NGO、NPO のような柔軟な建築物のほうが地震に有効である。震災直後に木造建築物がこのような壊れると言う写真が紹介されたが、その後、専門家の調査の中で、この写真はこのような壊れないと紹介されている。同じ写真でも矛盾した見方をされるのが現実である。

地震時の「火災は大敵」であるが、日本伝統構法で建築物はそれなりの木材を使用すれば、火災で燃え尽きることは少ないと聞いている。昔は栗の木等を使用しているため、火災時には炭化し、それ以上燃えない。台湾の地震後に見たが、140年前の伝統構法で建てられた建築物は一部損壊程度であったが、その後放火により火災にあった。しかし、全焼することなく柱が残った。「伝統構法」はすばらしい技術であることを改めて見直した。

私達素人が専門家の皆様とどう連携（コラボレーション）していくかが、今後の課題である。私達は建築の設計等は出来ないが、地震に対するアドバイス、家具の転倒防止の手伝い等で関係できる。長い復興の過程で、いろんな分野で課題が出てくる。法律相談、生活設計等のあらゆる分野の専門家と関係できる。弁護士の津久井先生はいろんな専門家が窓口を設けて、相談に応じているが、なかなか相談にこないと嘆いておられる。ボランティア活動の傍で窓口を設けていると、年寄りの困り事が聞こえてくる。専門家の方から声を掛けると、誰もが困り事の相談をし、問題点の解決につながる。



写真2 村井雅清氏

○森広浩允氏

＜我がまち“いずみ台”の自主防災会＞

森広浩允氏は自治会の防災会会長の立場から防災会の設立、防災活動状況およびその課題について講演された。

わが町いずみ台防災会は泉南市にある。泉南市はご存知ない方もおられるかもしれませんが、大阪の南部、関西国際空港の対岸に位置しております。ゲートタワーから写した写真では、関空連絡橋の袂にあるのが泉佐野市で、泉南市はその南側の和歌山寄りに位置しています。泉南市には熊野街道が縦断しており、熊野街道は昔京のお公家さん、庶民の皆さんが「蟻（あり）の熊野詣」と申しまして、熊野三山におまいりした街道です。熊野街道には藤の美しい信達宿が昔の面影を

残しております。また泉南市には昔の面影を残した大阪唯一の梅林が有名な金熊寺、紫陽花で有名な長慶寺等があります。関空の向かいには白浜のマーブルビーチもあります。

泉南市には農業用のため池が多く見られる。我が街いずみ台周辺にもため池があり、その周りには住宅地があり、環境はよい。平面図で見ると住宅地の周りにため池がある。このような地形で、皆が安全性について心配していた。このような環境の中で、阪神・淡路大震災が起これ、神戸で大きな被害が発生した。これを見て、自分達の街は自分達で守らなければならないと言う事が、自治会会長の思いであった。総会の時自主防災会を作ると言う話になり、手を挙げた有志が中心になって、設立に頑張った。

「設立の目的」

- 1、いずみ台防災会は住民の隣保共同の精神にもとづく自主的な防災活動により地震などの災害の防止や軽減を目的とする。
- 2、防災活動を通じて人々が集まり楽しく活動する場を設け、いずみ台住民全員が“安心して・楽しく暮らせる”まちづくりを目指す

防災を通じて、街づくりをおこなうことが目的である。2番目の楽しく活動することが、活動を継続的に続けるには重要である。

「設立の経緯」

平成20年6月に自治会からの呼びかけに応じて、有志による自主防災設立委員会が12名で発足し、その後20名になり、意見交換・事例研究を重ね、同年12月に自主防災組織の設立を提言した。いずみ台は180戸程度のミニコミュニティで、住民は350~400人程度である。

そして、平成21年4月の自治会総会で設立が承認された事を受けて、設立準備委員会のメンバーが中心となり、新しいメンバーを募集し、会則、組織等を取りまとめ、同年9月1日（防災の日）に設立された。

泉南市では、12番目の自主防災組織として同年9月10日に受理された。

「活動方針」

活動の方針は全員の唯一のこだわりがある。

- 1、自分達のまちは自分達でまもる。
自主防災組織は公助が期待できない共助、自助の組織である。災害が起きて公助が期待できない3日間は自分達のことは自分達でまもる。3日間は市役所も消防も当てにできないと言う事で活動を続けてきた。

2、活動は楽しく、出来ることから始める。

活動は楽しくないと続かない。楽しく出来ることから始めるため、最初は簡単なことから始めた。

この大きな2つの活動方針を、唯一のこだわりとして活動を行っております。

「組織」

組織の方はあくまでも自主ボランティアである。自治会からの割り当てでも、順番でもない。いずみ台では入居して30年程度経つ。どこの自治会でも同じではないかと思うが、入居時には働き盛りの人が多く、同年代で、能力的には同程度の人が多い。このため、自治会長および他の役員は順番で行ってきた。しかし自主防災会はやる気のある人たちの集まりであり、あくまでも自主ボランティアである。

泉南市には12ほどの自主ボランティア組織がある。私達の組織は12番目に出来たものである。市のほう聞いたところ、一生懸命活動されている団体は1つ位であるとの事であった。この原因としては、防災会を作るに当たって、役所の方から町会、自治会なりをお願いをし、町会、自治会の下部組織として発足し、活動される。このため、役員も順番で変ることになる。このため活動が活発にならないと聞いております。このため、我々の組織はやる気のある人たちの集まりである自主ボランティアで活動しております。

2つ目はやる気集団である。やる気があるから、様々なことを立案し、実行する。声をかけるとやる気の出る人もおられます。このため、広く会員の募集も行っております。メンバーは徐々に増えております。

3つ目は得手分担であります。現在会員は引退した方がほとんどであるが、現役時代はそれぞれ専門分野をお持ちであった。それぞれ得手の分野がある。得意な分野を自主防の中で担当していただく。そして男女関係なく、女の方にも出来る多くの分野がある。自治会の中にも防災に意欲的な方がおられる。専門的ではないがやる気十分な方もおられます。そういう方々と共同で活動しております。

4つ目は他の自主防でもあると思いますが、組織には本部、情報班、消化班、救出・救護班、避難誘導班、給食・給水班、要援護者支援班等が私どもの自主防にもあります。そのほかに、自治会は各ブロックがあり、このブロックをまとめ、世話をする幹事を設けております。各班の専門職的な方と、全てをこなす幹事の両方が自主防の組織の特徴です。

「活動報告」

自主防はまだ出来て1年に満たないが、今までの活動報告を行います。定例会は月1回実施している。現

役の人もいるので夜7時から行っている。時には1杯飲みながら楽しく行っている。そして、各種訓練、研究会への参加ですが、消防署にお願いして普通救命講習を2回、地域の合同防災訓練は1回、防災リーダー講習（リーダーの養成）は1回2名、緊急防災なべ体験を2回全員で実施した。緊急防災なべ体験は会員の懇親会を兼ねたもので、メニューは食べ物はそのとき買うのではなく、鍋、コンロ等を用意し、自宅にある食材または畑にあるものを持ってくる。緊急時に買い物が出来ない時、手元にある材料で鍋をするイベントです。緊急時に役立つ活動です。

次に防災施設の見学会です。人と未来防災センターを見学し勉強させていただきました。人と未来防災センターに行くのも遊び心で、関空から神戸空港までベイシャトルの無料試乗体験を利用し、全員無料で行ってきた。4番目は「防災だより」の発行です。既に6号まで発行しております。1号は9月11日に、3号は阪神・淡路大震災が起こった1月17日に発刊しました。防災だよりはポイント、ポイントでそのときのニーズに合わせた情報を提供しております。防災だよりもこういう事が得意な方がおられたから出来た。すばらしい防災だよりだと思う。希望される方はレジメに示したメールアドレスに連絡してもらえれば提供できます。

活動マニュアルは班単位でまとめたものを、編集委員会で編集作業を現在行っております。防災講座は泉南市に伝市メールという出前講座がある。テーマは色々あるし、我々が決めてもよい。今回は「東南海・南海大地震発生での「被害想定」と「自助・共助」というテーマでお願いしたところ、向井市長が講師としてお見えになった。被害想定は「いずみ台」についてもお願いしたが、データがないということであった。泉南市全体の詳細な被害想定を示され、その上いずみ台の造成時の図面（造成図）をお持ちいただき、各人の宅地の切土、盛土が判明した。情報の公開は大事なことで、大変よかった。

防災意識のレベル調査として、アンケートを実施した。また減災対策としてそれぞれの家庭で実施されているかを調べるためでもある。回収率は70%である。会員募集は当初リーダーの募集をしたが、応募はなかった。このため会員の募集に切り替えた。4月1日の総会の時に募集を開始し、9月1日の設立時には16名に増え、それ以後の防災会の活動が実り、現在の会員は24名である。

これからの活動として、

1、防災マップづくり（ハザード）

- 2、活動マニュアルの仕上げ
- 3、会員の訓練（DIG、個別、総合訓練）
- 4、防災イベントの開催（住民参加の楽しい訓練）
- 5、先進事例の研究
- 6、資機材の調達（地域づくりの助成金利用）

このような活動は、まず危険災害の予知をし、それに備えることである。このため自分達の住んでいる場所の危険箇所を知る必要があり、次に、地震の規模を想定し、自分達の住んでいる町がどのような被害受けるのが調べる必要がある。シュミレーションする必要がある。これが減災活動になる。

我々の住んでいる、いずみ台は住むための環境は素晴らしいが、危険と背中合わせである。防災会館となる自治会館は崖の上にある。また、1次避難所となる公園は自治会館の隣にある。別の避難場所は切土であるため大丈夫であると思う。泉南市からいただいた切盛造成図を元に、安全性のチェックをしたいと思う。先日国土地理院の都市圏活断層図をチェックしたところ、我々の住んでいるところに赤い囲みが見られた。これはこの箇所が過去に動いたことがあることを示すことか専門家に相談したい。

このように様々な活動を行っていますが、我々のこれからの課題は多くある。1番は防災意識の高揚である。このため、様々な情報を発信し、防災意識を高めてもらう努力をしている。先ほど村井さんから見せていただいた神戸の被災状況を発信する必要がある。そして2番目は高齢化と独居化である。我々の自治会においても60歳以上の高齢者の入居率は80%である。これは悲観材料だけではない。高齢者は休日、昼間は家におられ、在宅率が高いというメリットがある。3番目はマンネリ防止に努め、飽きないような楽しいイベントを企画し、実行していきたい。4番目は他の自主防との協調です。

行動するいずみ台自主防の現況を御報告させていただきました。



写真3 森広浩允氏

＜質疑応答＞

Q. 森広さんにおたずねしたいのですが、講演の中で泉南市の方から「宅地の切盛図」を持ってこられ、公開されたと聞いたが、何も問題が生じなかったのか。我々の団体がハザードマップ等を公表しようとしたら、地価が下がる等の理由で自治体等から待たがかかるとある。いずみ台ではこういう問題はなかったのですか。（NPO法人 都市災害に備える技術者の会 伊藤氏）

A. 自分達が選んで買った土地であるから、自分達の責任である。今後の事を考える上で情報は公開してもらったほうがよいと思う。（森広氏）

Q. 河田さんは紙芝居等をつくり、幼稚園等で活動されているが、その活動資金はどのようにされているのか。（技術士会 貴志氏）

A. 多くは自分達でアルバイトをしている。その他紙芝居の作成費等幼稚園から助成してもらえることがある。（河田氏）

4. 提言

（社）日本技術士会近畿支部建設部会の川口俊雄氏より提言（宣言）した。

5. 閉会あいさつ

○森田孝雄氏

（社）日本技術士会近畿支部建設部会 副部長

本日はお忙しいところ多数の方にご出席いただき有難うございます。今回のシンポジウムは大阪で4回目の開催にあたりますが、神戸で最初に開催したのは平成12年であり、以後神戸で毎年シンポジウムを開催しております。目的は都市災害に備えるネットワークづくりと言うことで今回も引き続き開催しております。本日はパネリストの方々に大変貴重なご講演をいただきました。これをもとに今後も皆様とこの会を続けていきたいと考えております。来年の1月と6月には引き続き当会で開催を計画しております。皆様のご協力で開催を実行したいと考えております。企画等に何かご提案が御座いましたらどしどしご意見をお寄せください。本日は長時間お付き合い願いまして有難う御座いました。

その後、受付にて配布されたアンケート（別紙）の回収が行われ閉会した。

なお展示会は、インテックス大阪3号館において、近畿支部防災研究会の協力を得て、展示を行った。

（湯原徹 記）

セミナー聴講者アンケート結果

1. 本日のセミナーを知ったきっかけは何ですか？

- 主な回答 1、招待状 (54%)
2、ホームページ (29%)

2. このセミナーを聞いた感想はいかがでしたか？

- 主な回答 1、大変満足 (18%)
2、満足 (54%)
3、普通 (18%)

※ 理由をお聞かせください。

- ① 若い講師、先生方が一生懸命お話をしており、大変好感がもてました。三人ともすばらしかった。ありがとうございました。
- ② ネットワーク作りの大切さを改めて認識できた。
- ③ 災害が起きた後の心のケア、心の支援、防災教育、防災に対する知識が豊富、ネットワーク情報量も多い。NPO も豊富、解りやすい説明、自主防災・減災の為の話。
- ④ 伝統構法で建築した木材のありかたについてもっと知りたい。
- ⑤ 森広氏の会は楽しく運営されている。
- ⑥ 森広講師の防災新聞を参考にしたい。
- ⑦ 防災に関する活動内容を知ることができた。
- ⑧ ボランティアのことがよくわかった。
- ⑨ 普段聞けない貴重な話が聞けました。
- ⑩ 機会を得たことがよい。
- ⑪ 防災は“やる気”だと感じた。
- ⑫ 手作り感があった。

3. このセミナーを受講された理由は何ですか？

- 回答 1、業務上にて必要 (11%)
2、テーマに興味があった (72%)
3、講師に興味があった (15%)

※ 理由があればお聞かせください。

- ① 村井先生の活動を前任者より聞いて。
- ② 自主防災ボランティア。
- ③ パネリスト。
- ④ 森広講師。
- ⑤ 地域防災についての勉強。
- ⑥ 先輩から薦められて受講しました。
- ⑦ 地域自立防災委員会をしており、活動の参考となる情報収集のため。

⑧ 防災の仕事で関わるから。

⑨ 技術士会の紹介で。

⑩ もっと実態を知ることができる。

⑪ 自分が直面した阪神淡路大震災で感じたこととの比較。

4. 本セミナーの感想・次回聴講したいと思うテーマ等があればお聞かせください。

① 大変勉強になってありがとうございました。

② 森広講師の話にあった「楽しくやる」をヒントに防災対策を進めていきたい。

⇒会社の防災対策の担当であるが、話題がシリアスなものであるだけになかなか社員が反応してくれない。「楽しく」をテーマの1つにする事で社員が積極的に参加してくれる様にしたいと思う。

③ 自主防災について現在やっていますが、自主防災についてもっと知りたい。

④ 技術士会主催であることから技術的な話と思ったが、ソフト系の話のみであった。これはこれで良かったが、もう少し技術的なものも加えたらさらに期待したものになったであろう。

⑤ 政治とボランティア

⑥ 特にありません。ただし講演会場をもう少し静かな場所にしてほしいです。折角の先生方の話が聞きづらい。

(森田孝雄 編集)